

学術情報流通におけるオープンアクセスへの研究者の関心 ー心理学研究者を対象とした質問紙調査ー

神尾 彩子

現在、学術情報の電子化の流れの中で、研究成果をインターネット上に無料で公開するオープンアクセスの理念が関心を集めている。従来、自然科学分野を中心に広められてきたオープンアクセスであるが、その範囲はさらに広がり、人文社会科学分野の利害関係者間でも必要性が議論されている。一方で、自然科学及び人文社会科学分野にはオープンアクセスに消極的な者も多数いる。近年では、当事者である研究者のオープンアクセスの認知度に注目が置かれ、諸外国で調査研究が行われている。しかしながら日本では、オープンアクセスが先進的な、自然科学や全研究分野の研究者の傾向を把握するための調査研究は行われているものの、人文社会科学分野の研究者を対象としたものは存在せず、彼らの関心がどの程度なのかは明らかになっていない。

本研究の目的は、自然科学と人文社会科学の性質を合わせもつ心理学に焦点を当て、研究者のオープンアクセスの認知度を明らかにすることである。心理学分野の学際性と、オープンアクセスの認知度との関連性を見出し、専門分野による研究者の認識の違いについても検討する。

研究方法として質問紙調査を用いた。調査対象者は研究開発支援総合ディレクトリ ReaD から無作為抽出した心理学研究者 1,708 名である。研究情報収集の方法、研究成果の発表方法、オープンアクセスとセルフ・アーカイビングの認知度や、オープンアクセス雑誌やリポジトリでの研究成果の発表経験の有無について質問した。

心理学研究者 526 名から回答を得た。分析の結果、オープンアクセスの認知度は 58.8% であった。5 年前の先行研究を約 25% 上回り、理念やその概要について認知されつつあることが明らかになった。また、専門分野別でリポジトリに対する認識に違いが見られた。和文誌を中心に研究成果の発表を行う等、人文科学系研究者と似た性質をもつ臨床心理学と教育心理学の研究者はリポジトリについての認知度や利用率が高いがオープンアクセスの認知は他 2 分野に比べて低く、オープンアクセスの手段のひとつとしてリポジトリを認識していないと考えられる。また、欧文誌を中心に研究成果の発表を行う等、自然科学系研究者と似た性質をもつ実験心理学と社会心理学の研究者はオープンアクセスの認知はしているが、リポジトリに研究成果を投稿していないことから、リポジトリをオープンアクセスを実現する手段として認識していないと考えられる。

オープンアクセスやセルフアーカイビングの認知が高まる中、本研究で明らかになった実験心理学、社会心理学及び臨床心理学、教育心理学間の認識の相違を狭めていくことが、心理学分野でのオープンアクセスにおける今後の課題になると考えられる。

(指導教員 逸村裕)